

「我が人生思い残すことなし」(後編)

きたごう はると
作：北郷遥斗

※ 前回までのあらすじ = 雄大とはるか父大志が失踪した年の夏、祖父母の居る神戸の実家で過ごしていた。そこでは父のかつての出来事や生活の様子やその、想いを肌で感じ取っていた。そして今、その原点である「広島」へ祖父母と共に訪れ、今、街中深く足を踏み入れようとしていた。=

(尚、ホームページでもこれまでのストーリーを見る事が出来ます。 www.kyodo-keiei.co.jp)

8. 祈り

原爆ドームは平和公園の中にあった。その「ドクロ」は、50年前の姿そのままの表情を雄大たちの眼に映し出していた。その足元に無数の瓦礫が残され、まさにその空間は身を置いている雄大にさえ決して体験する事のない当時の出来事を思い起こさせる程の力を降り注いでいた。「これが原爆の生き証人や。」しばらく無言でたたずんでいた3人を我に返らせたのは昭男だった。

「こうやって周囲にどんどんビルが建ち、発展していても、ここだけは壊死した様に悲しみや、苦しみや、憎しみや、無念さをそのまま今に訴えてるんや。」「何だか恐いわい。」はるかが声を上げた。「そやなあ。」美子が肩からはるかを抱き寄せた。雄大は

少し落ち着きを取り戻すと除々に辺りを見渡した。そこには雄大と同じ位の中学や高校の修学旅行生。家族連れや老夫婦などが思い思いに行き交い、写真やスケッチをとり、祈りを捧げていた。中でも目を見張ったのが外国人の多さだった。それは日本人と思われる数と同じかそれ以上にも見えた。そして彼らは必ずと言っていい程、一つ一つの石碑やモニュメントの前に集まっては、ガイドと思われる人の話に耳を傾け、ペンを取り、言葉を交わしていた。それも子供だったり、学



生だったり、年輩者だったり「ヒロシマ」を思い思いに感じ取っていた。確かに世界遺産として登録されてから一気にその数は増えたそうだ。「外人がぎょうさん増えたなあ。」昭男が関心して言った。「前はそうやなかったん？」美子が聞いた。「ああ、30年前にいっぺん大志を連れて来た時は日本人しかおらへんかった。みんな傷を癒す様にしとっただけやった。それが今はこうして世界中から来て、ちゃんと知ろう、何かを学ぼうとしてる。見てみ、あんな子供まで・・・。え

え事や。ほんま、ええ事や。」昭男は珍しく声を詰まらせた。「あのガイドの外国人はボランティアなんですよ。」近くを通りがかった若い日本人女性が昭男たちに声を掛けた。「そうなんですか。」美子がおどろいた。「ええ、皆夏休みを利用して各国から集まって来る学生さんたちです。ここを訪れる母国などの人たちのために・・・。」「へえ～えらいんやなあ。あなたはどちらから？」「東京からです。私もボランティアで彼らのお手伝いをしています。」話を耳にした雄大は自分の胸の内に何か強く確信的なものを感じていた。昭男達は平和の灯の祠(ほこら)の前で足を止め、『安らかに眠り下さい。過ちは二度と繰り返しませぬから』を改めて胸に刻んでいた。この灯は世界中から核兵器がなくなるまで燃え続けているのだという。雄大は自分の眼にその灯を焼き付ける様に見つめていた。と、その時、雄大の目に父大志の姿が映った。「お父さん！」雄大はおもわず声を上げた。「何！どこ？」昭男の問い掛けに「あそこ・・・。」と指を指した時にはもうその姿は見えなくなっていた。「あほやなあ、違う人やろ？見間違いや！」美子が答えると、「そや、そんなはずない。」と昭男も頷いた。・・・そやな、こんな所に居るはずはない・・・雄大は自分に言い聞かせた。「さあ、行こう。」昭男が声を掛けた。「どこへ行くの？」今度ははるかがたずねた。「平和記念館や、すぐその。」昭男は後ろの建物へ向かい出した。皆んなそれに続いて行った。(つづく)